

備えその1 防災力の向上を目指して！

大崎市総合防災訓練

日時 6月8日(日) 8時45分～

会場 岩出山地域あったか河川公園
鳴子温泉川渡地内

内容 発災対応型訓練、初期消火、応急救護、救出訓練、炊き出し、ライフライン復旧訓練、(鳴子会場は土砂災害警戒避難訓練)など

会場周辺の住民の皆さんは避難訓練に参加していただきます。徒歩により避難所までの道のりを確かめてみてください。他の地域の皆さんは訓練風景を見学し地域での自主防災組織活動の参考にしてください。

※8時45分に訓練開始のサイレンが鳴ります。災害と間違えないようご注意ください。

※駐車場に限りがありますので乗り合わせで来場のうえ、誘導員の指示に従ってください。

問 防災安全課 ☎ 23-5144



「近い将来高い確率での発生が予想される宮城県沖地震。訓練に参加して、いざという時の心構えと、近隣の人たちと協力し合い「自分たちの地域は自分たちで守る」という地域の防災力の向上を目指しましょう。」
市防災安全課 五十嵐主査

分で、自分たちの地域は自分たちで守る」という防災意識を高め、備えを怠らないことが大切です。

組織率100パーセントを目指して！自主防災組織の活動

発生が危惧^{きぐ}されている宮城県沖地震などの大規模な災害が起こった場合、行政をはじめ防災関係機関は全力を注ぎますが、同時多発火災やライフラインの破壊などにより、活動が一時的にまひすることがあります。

必要です。

このような自主的な防災活動は、個々に行うのではなく、隣近所の人たちと力を合わせ一体となつてこそ大きな効果を生み出します。このための組織が「自主防災組織」で、市ではすべての行政区での結成を目指しています。

市内の組織率 83・4%
(二五七行政区中二九七行政区)

各地域別の組織率 松山、三本木、田尻 100% 古川 98・7% 鹿島台 50% 岩出山 35・1% 鳴子温泉 45・2% (五月一日現在)

日ごろから出来ること

自主防災組織は、災害発生

時に効果的な活動ができるよう、日ごろから組織としての実効性を高めておくことはもちろんですが、それ以上に大切なことは、いざとなつたらお互いに助け合う、お互いさまでいう共助の意識を持つことです。

万一の時に連携が取れるよう、日ごろから隣近所と顔の見える関係を作っておくことが大切です。

また、自主防災組織として効果的な活動を行うためには、まずは自分や家族が助かることが大前提です。いざという時に備え、日ごろから各個人・家庭でできることを再チェックしましょう。

備えその2 非常持出品・備蓄品を準備する

非常持出品は避難するときに持ち出す最小限の必需品です。必要最低限のものをまとめてすぐに取り出せるよう日ごろから準備しておきましょう。非常備蓄品は、非常食や水、生活用品を災害発生から3日分を目安に準備しましょう。

たとえば・・・

- 貴重品 ▶現金、預貯金通帳、健康保険証、印鑑、携帯電話など
- 非常食 ▶かんパン、アルファ米、缶詰、粉ミルクなど
- 水 ▶1人1日3リットルが目安で3日分用意しておく。定期的に購入し入れ替える
- 応急医薬品▶消毒薬、胃腸薬、かぜ薬、目薬、ばんそうこう、包帯、持病の常備薬など
- 衣類など▶下着、上着、靴下、タオル、生理用品、紙おむつなど
- 携帯ラジオ▶小型で軽く、FMとAM両方聞けるものが望ましい。予備の電池は多めに
- 懐中電灯▶停電のときなどの必需品。予備の電池も忘れずに。ろうそくの場合はライター(マッチ)もセットで
- その他▶紙皿、紙コップ、ナイフ、缶切り、栓抜き、ティッシュ、ビニールシートなど



あのときを忘れない

特集 備える

～宮城県沖地震から30年、防災対策は万全ですか？～

昭和五十三年六月十二日午後五時十四分ごろ、地中から突き上げるような激しい揺れが宮城県を中心とした東北、北海道、関東の太平洋沿岸一帯を襲いました。気象庁により「一九七八年宮城県沖地震」と命名されたこの地震はマグニチュード七・四を記録し、県内で死者二十七人、負傷者一万一千人、被害総額約二千七百億円(当時の宮城県の年間予算に匹敵)という大きな被害をもたらしました。この地震を教訓として県では、六月十二日を「県民防災の日」と定め、市でも防災訓練などにより、防災力・防災意識向上のための活動を行っています。

「一九七八年宮城県沖地震」から三十年、県民防災の日にあたり、防災について考えてみませんか。

三十年以内に99%

五月三日、ミャンマー南部を大型サイクロンが直撃、十二日には中国南西部四川省で、マグニチュード七・九の強い地震が発生しました。現地は大変な被害を受け、現在も懸命な復旧作業が行われており、一日も早い復興が望まれます。

地震をはじめとする自然災害は、現代の科学の力でも、完全に予測することは不可能といわれ、ましてや発生を防ぐことはできません。

大崎市はかつて宮城県沖地震を経験しました。その後も、平成八年八月鬼首地区を襲った宮城県北部地震や平成十五年七月鹿島台地域が大きな被害を受けた宮城県北部地震なども経験しています。

昭和六十一年八月の豪雨で

は、吉田川の堤防が決壊し、鹿島台地域を未曾有の被害が襲いました。最近では、平成十九年二月に国道一〇八号の土砂崩落が発生、道路が遮断され、鬼首地区住民の生活に大きな支障をきたしました。世界中から、災害で尊い命が犠牲になるなどのニュースを聞くたびに、多くの災害を経験してきた私たちは、遠いところの出来事とは思えず胸が痛みます。

国の地震調査委員会が平成十五年に公表した「宮城県沖地震の長期評価」によると、地震発生の可能性は年々高まっています。今後十年以内に60%、三十年以内に99%以上の確率で、次の地震が発生すると指摘されています。

今後発生が予想されている宮城県沖地震に備え、一人ひとりが「自分の身の安全は自

「退」庁しように向かった自転車置き場で突然揺れがきて、屋根の瓦がバタバタと落ち、みんな腰を抜かして座り込んでいたのを覚えています。災害対策本部で被害状況の確認やライフラインの確保のため、3日間家に帰れませんでした。地震直後は断水や停電、都市ガスの供給がストップし、市民生活が半ばまひ状態に陥り、ライフラインの確保が最優先でした。

当時は、現在のようにボランティアや救援体制などが整っていなかったので情報収集も大変でした。災害時は多くの情報を集め、住民に正しい情報を伝え安心してもらうことが大切です。

時間がたつと忘れてしまいがちですが、災害時の心構えや連絡方法など、日ごろから家族で確認しておくことが大切だと思います。」

昭和53年宮城県沖地震当時、古川市総務課で防災担当だった守屋政策課副参事

